# 初等部

## ２０２５年度教育活動

初等部部長　髙橋 出

今年度の特徴的な教育活動を挙げるとするならば二つある。一つは、6年生が初等部のためになると考えたアイデアを、できる限り実現したことである。6年生はコロナ禍の中の入学だったため多くの行事、活動、学習は中止、または変更、縮小して行うことばかりだったからだ。二つ目は戦後80年の節目の年に、平和と戦争について、学年に応じて礼拝や授業で取り上げ考えたことだった。子ども達が大人になっても戦後〇0年と言える社会であってほしいと願いを込めて、たくさんの種をまくことができた。

今年度の目標は「聴き合う」とした。子ども達には、自分達の教室、学級を誰もが楽しいと思える場所にするために友達の話を聴き合おうと語りかけた。それには何よりもまず、教員が意識して子ども達の話を遮らずに、最後まで聴くことを心がけた。自分の話を最後まで聞いてくれる安心感が、子ども達同士の対話の土壌を育むと考える。

そして、どうしても触れておきたいことがある。それは近年の激しい気候変動が、安全な教育活動の実施において無視できない状況になってきていることである。年間の高温日が増え、40℃に迫る日が珍しくなくなっている。また猛烈な豪雨が降ることが多々ある。行事日程や日々の生活、とりわけ登下校に影響が出始めている。日常的に最善の決定判断を求められ緊張する状況が増えている。子どもの安全を守る意識が高まっているため、今後は気象状況に対して的確な判断を迫られると日々痛感した。

しかし、この1年も初等部が一人ひとりの子どもの居場所にと教職員の深い想いの中で終えることができた。

### Ⅰ:キリスト教精神に根ざした人間教育

#### 一人ひとりを大切に

初等部生活の中でキリスト教を直接感じられる時は、毎朝の礼拝と昼食時の食前の祈りの時である。神さまに挨拶をして一日を始めること、様々な方と神さまに感謝して昼食を頂くことがこの時期の子ども達の心に根付いてほしいと願っている。通常の礼拝は、学年ごとに教室で担任が行い、そのほか不定期に全体、2学年で学園長、宗教主任である松坂先生や部長が行った。松坂先生の礼拝は2年目となり、より礼拝が子ども達にとって形式的な堅苦しいものではなく、身近で穏やかな朝になっている。また教職員がキリスト教の理解をさらに深める時となっている。学園長は月一回程度の礼拝で平和について度々、子ども達に語りかけられた。

来校した教員志望の他大学の学生の多くは、初等部の児童像を「子ども達は元気で、自分の考えを発言する子が多いですね」と語ってくれる。

生活や学習の中で子ども一人ひとりの考えを尊重し、よくきくことを教員が常に心がけていることのあらわれと嬉しく思う。

### Ⅱ:一人ひとりのケアと尊重

今年度も教育相談コーディネーター中村が中心の、支援体制で対応に当たった。毎週の支援会議と必要に応じた情報共有を行った。素早く、緊密な対応の末、問題や課題解消できたことがあったが、一方でケアに時間を重ねている事例に関しては、なかなか糸口を見つけることができない現状がある。一人ひとりのケア、尊重については個々の状況を把握し、粘り強く、ていねいにチームで当たりたい。どんな子どもの状況であってもひとりの人として尊重し見守っていきたい。

**Ⅲ:学習する学校、生活即探求**

子どもが自ら学べる楽しさを味わえる学習環境を整えたいと考え始めた学習発表会「JIYU のひろば」(学びの共有会)が定着しつつある。多くの保護者に加え、他校の教員や受験希望のご家庭の参加が多くなってきた。初等部教育の理解には説明会や相談会の話に加えて、最も共感いただけるのは子ども達の実際の姿をご覧いただくことにある。

「来年は〇〇を探求しよう」

という声を耳にするようになり、手ごたえを感じる。この日の発表で学びが「はい、終わり！」ではない、学びの連続、「探求的学び」の実践が根を張りつつあるのではないか。

普段の授業では、初等部の教員以外の大人、卒業生、現保護者、外部団体、そして内部中高等部生徒など多様な立場、年齢の人から学ぶ機会が多かった。教科書やタブレットの情報からは得られない実社会の仕組み、問題、課題など生の声を通して実感できる学びができている。多くの子ども達が興味を持って聞いていた。外部講師からはどの学年も質問が途切れることがなく、

「熱心ですね。」

と感想を伺うことが多い。

**Ⅳ:よりよい社会の小さなモデルとしての学校**

全校児童200人の小さな初等部には、学校運営の児童の役割として昼食の司会進行、生活時間を知らせる鐘鳴らしなど創立以来、変化はあるが続いている。コロナ禍後、より子ども達が主体的に学校を運営できるように委員会活動を導入した。初等部を良くするための9個の委員会が活動している。コロナ禍の中、一旦途切れた初等部らしい生活教育が復活しつつある。自分たちの学校という意識は、子ども達の中に再び増してきている。

遠足を前にした午後の時間に、一年生から六年生の家族の縦割り班で食堂に集まった。どんな遠足にしようか、何をして過ごそうかと相談し遠足を迎えた。6年生が優しく下級生に声をかけ、安心して発言しやすい雰囲気作りに心を砕き、下級生はそのおかげで安心して発言していた。年少者が自分の考えを自由に言えるのは良い社会を創るための第一歩だと考える。全校対話は初等部らしい実践である。

**Ⅴ:教育環境の整備、働き方・休み方**

初等部体育館の空調設備は、昨今の気象状況下で子どもと教員の命を守っていると言って大げさではない。熱中症警戒アラートが発令されると子ども達は、屋外では活動できないので体育館で過ごすことになる。運動は、この時期の子ども達の心身の成長に欠かすことはできないので本当にありがたい。

タブレットは現在5，6年生が個人、3，4年生は学校管理の端末を使用している。タブレットならではの学習活動も増えてきてはいるが、使い方の面では多くの課題があるのが現状だ。タブレットを使用した学習については世界的な議論になっていることを踏まえて、子ども達にとってより良い学習道具であるかなどの議論を重ねていきたい。

限られた教室を有効利用しようと今までの使用方法に囚われず、有効利用する回数が増えている。教育環境を整えることは教員と子ども達と一緒に日々の掃除や整理整頓を心がけ、このきれいな初等部の環境維持、管理を意識させたい。

教員の年間出勤カレンダー導入後、残業時間は減少している。忙しい中にあっても計画を立てて働くことを続けたい。

保護者や児童の対応は限られた時間の中で最善を尽くすこと、個人で抱え込む方法ではなく、チームワークで個人の時間的、身体的限界を越えないことを尊重する組織でありたい。

BLEND導入により年度末、春休みの個人成績をはじめ事務の業務が各段に簡略化された。例えば検討を重ねて修業証を打ち込みに変更したのがその一例だ。指導要録と連動しているため多忙な年度末の仕事量を軽減できた。引き続き業務の見直しは必要だが、軽減ありきではなく十分な吟味をした上で変えられることは変えていきたい。

**Ⅵ:新しい広報・教育内容の発信**

広報室初等部担当と初等部広報担当が今までになく頻繁にミーティングを行った。役割を分担し、出願者増を目標に掲げて活動を行った。説明会、外部相談会、幼児教室訪問、幼児教室説明会、幼児教室合同セミナーへの参加、地域のイベント企画、初等部行事一般参観を例年通り行った。6年生が活躍する説明会では、参加者に我が子の 6 年後の成長の姿をご覧いただけている。しかしながら出願数は、減少した。従来の活動を大事にしながら初等部の教育の充実と発信、広報の両輪でこの厳しい状況を乗り越えたい。

教育内容の発信は、Ⅲで触れた誰もが立場を越えて学ぶ「JIYU のひろば」の認知度を更にあげたい。一般では、受験検討のご家庭と私立小学校教員の参加があり、率直な感想や意見をいただけた。校内からは中、高生徒と教員の参加があった。中高生が小学生の発表に耳を傾け、質問している光景が見られた。その中には初等部卒業生も多く、部を越えた広がりと連続性のある学習展開は、他校ではあまり見られない自由学園らしい学びの発信ができている。

初等部の探求学習は、まだ始まったばかりであるが、子どもが主体の学習がコツコツと積み重なってきている。

外部参加可能行事として欠かせないのは、3学期開催の美術校内展覧会だ。毎日の当たり前の生活の中からヒントやアイデア得て、作品を生み出すことが初等部美術である。美術教員の入れ替わりはあるが、自分の表現したいことが主体的に自由に表現できている作品が多く、初等部らしい美術教育が発信できている。

**Ⅶ:経営基盤とネットワーク　永続的発展を支える組織構築**

25 年度は新1年生33人、全児童数192名で始まった。今年度も国内外からの転校希望の問い合わせや見学が増えている。中等部への進学者数は、コロナ禍の中の初等部生活が影響するのではないかと危惧していたが、19名のご家庭が中等部に進学した。

担任2人制は引き続き、児童数確保のひとつの重要な要素であると考えている。私立小学校は、きめ細かで特徴のある教育を推進するために、ひと学級の人数を抑える学校が増えている。公、私立の他校の動向を注意深くみながら 2 人担任制は、子ども達、教員にとっても安定的、かつ発展的学校経営のために進めたい。そして教育内容の発信と共に、2人担任制の良さを積極的に発信したい。永続的かつ安定的な学校経営を支えるためには、教育部門の幼稚園、中・高校と最高学部と広報本部をはじめ組織に縛られず、部署を越えて学校発展のために協力関係をより強固にしたい。

**Ⅷ:アフタースクールについて**

アフタースクール主任　竹田麻希

**Ⅷ－Ⅰ 子どもの声を基盤とした環境づくり**

2025 年度も 2024 年度に引き続き、「子どもの声を聴くこと」を活動の基盤に据えた活動を行った。また、子どもたちが安心して挑戦できるよう、「失敗しても良い」と感じられる雰囲気づくりを重視した。年度末アンケートでは子どもの満足度が上がり、全体として取り組んだ成果が見られた。

**Ⅷ－Ⅱ保護者参加行事の充実**

保護者参加型プログラムや交流会を増やし、保護者・子ども・スタッフがともにアフタースクールをつくりあげられる機会を増やした。活動を共有しながら交流を深めることで、子どもの育ちを支えるコミュニティとしてのつながりを強化した。学童保育の保護者交流会では、流しそうめん・お餅つきを行い、多くの保護者が参加した。参加者からは「また参加したい。」、「大人が夢中になって汗をかいてとても気持ちが良かった。」等ポジティブな声が多くあった。

**Ⅷ－Ⅲ子どもの声の実現**

リクエストプログラムや学童保育の日常活動において、子どもたちから寄せられた意見や提案を積極的に取り入れた。自分たちの考えが実際の活動に反映されることで子どもたち自身が意見を述べやすいようにした。

リクエストプログラムを実施することで子どもたちが日常的に「このプログラムがやりたい。」とアフタースクールスタッフへ声をかけることが増えた。

**Ⅷ-Ⅳ学びと暮らしをつなぐプログラム**

教科学習との関連を意識したプログラムを実施し、学校での学びを発展させる機会を提供した（理科系・自然科学系等）。また、ものづくりや生活体験など、「暮らしを丁寧につくる」ことをテーマとした活動にも継続して取り組んだ。自由学園のお醤油プロジェクトとしてお醤油づくりをしたことで、毎日自分たちの食事で使用される調味料（お醤油）のできる過程を身近に感じたり、手作りすること・丁寧にすることの大切さを学び、生活の両面から、子どもたちの成長を支える実践を進めた。

**Ⅷ-Ⅴみらいかんの活用**

みらいかんを活用し、クリスマスの時期に保護者や地域の大人を対象とした「くらしのワークショップ」を実施した。ワークショップでは、アフタースクールのお花のこよみ教室講師である小林亮子さんにオーナメント作りと美味しい紅茶の淹れ方講座をしていただいた。アットホームな雰囲気で色々なお話をしながら楽しいほっとするひと時となった。みらいかんを子どもを取り巻く大人が学び合い、交流する場として機能させ、地域を含めた育ちの環境づくりに寄与した。

**Ⅷ-Ⅵ学童保育と幼稚園預かり保育との交流**

学童保育と幼児生活団幼稚園預かり保育との定期的な交流を継続した。異年齢の子どもたちが関わる機会を通して、内部進学へ繋げると共に、それぞれの成長を感じる良い時間となった。

**Ⅷ-Ⅶ利用者増加へ向けた取り組み**

初等部全児童の 90%以上がアフタースクールの活動へ参加することを目標に活動し、2025 年 7 月には目標を達成することができた。これまでで一番多くの子どもたちがアフタースクールの活動へ参加できた年となった。



Ⅷ-Ⅱ　保護者交流会



Ⅷ-Ⅱ　保護者参加型プログラム（焼き芋）



Ⅷ-Ⅱ　保護者参加型プログラム（天体観望）



Ⅷ-Ⅲ　リクエストプログラム（和菓子）




Ⅷ-Ⅲ　リクエストプログラム（遠足）



Ⅷ-Ⅵ学童保育と幼稚園預かり保育との交流